

P2-3-6 子宮頸部上皮内病変に対する接触型 KTP レーザー蒸散術に関する検討

東京医療センター

仙波宏史, 山下 博, 大木慎也, 二宮委美, 福武麻里絵, 林 茂徳, 上野和典, 高橋 純, 小澤伸晃, 新井宏治

【目的】HPV 検査の普及に伴い、レーザー蒸散術の適応は拡大している。子宮頸部上皮内病変に対する接触型 KTP レーザーを用いたレーザー蒸散術の有用性について検討した。【方法】2006年6月より2012年8月の間に、当院にて接触型 KTP レーザーを用いた蒸散術を行った中等度異形成、高度異形成、および上皮内癌の54例を対象とした。当院倫理委員会の承認を得た上で、1:術後細胞診異常の出現頻度、2:細胞診異常出現の時期、3:治療の成否に寄与したと考えられる要因についての検討を行った。【成績】1:術後細胞診異常の出現頻度は54例中17例(31.5%)であった。2:細胞診異常出現の時期は17例中15例が術後第1回目(4カ月以内)、1例が術後第2回目(5カ月)と比較的早期であった。他の1例は18カ月目であった。3:治療の成否に寄与する可能性があると考えられた年齢・妊娠の有無・Body Mass Index・術前病理診断・手術時間・病変の広がりについて多変量解析を行った結果、病変の広がりのみが有意に治療の成否に関与していた。【結論】当院における接触型 KTP レーザーを用いた蒸散術の治療成績はCO₂ レーザーを用いた諸家の報告に比べやや劣っていた。病変が広範囲である場合は治療効果が不十分となる可能性があるため、コルポスコープによる病変の広がりへの評価は治療の適応を検討する上で有用であると考えられた。

P2-3-7 子宮頸部病変に対する光線力学療法 (PDT) により high-risk HPV は消失する

佐々木研究所附属杏雲堂病院¹, 慈恵医大²嘉屋隆介¹, 坂本 優¹, 三宅清彦¹, 小屋松安子¹, 茂木 真¹, 田中忠夫¹, 岡本愛光²

【目的】光線力学療法 (Photo Dynamic Therapy; PDT) は Cervical Intraepithelial Neoplasm (CIN) 3 に対する有効な治療法の一つであるが、Human Papilloma Virus (HPV) が治療後どのように推移するかについては、国の内外を問わず殆ど報告がない。そこで、PDT 前後に施行した HPV genotype 検査の結果を調査し、その推移を明確にする。【方法】2006年から2009年までに組織学的に CIN3 と診断され PDT を施行した症例のうち、治療前にインフォームドコンセントを取得した後に HPV genotype 検査を行った 51 例を対象とし、HPV genotype, 組織診および細胞診の結果を、後方視的に比較検討した。HPV genotype 検査には 37 種類の HPV genotype が検出できるアンプリコアリニアアレイ HPV ジェノタイピング法を用いた。【成績】年齢の中央値は 32 歳 [19~48 歳]、経過観察期間は 49 カ月 [3-73 カ月] であった。PDT 施行前では全例で Hybrid Capture 2 法で検出される 13 種類の high-risk HPV (HR-HPV) が陽性であり、HPV16 は 34/51 例 (67%)、重複感染は 19/51 例 (37%) であった。治療後 3 カ月において CIN は 43/46 例 (93%) で消失し、6 カ月以後の再発は CIN3 の 1/48 例 (2%) のみであった。治療後 2・6・12 カ月の HR-HPV 陽性例 (率) はそれぞれ 13/42 例 (31%)・3/41 例 (7%)・4/39 例 (10%) であったが、治療前と同じ HPV genotype であったものは 13/42 例 (31%)・2/41 例 (5%)・2/39 例 (5%) であった。治療後 3 カ月に CIN が遺残した症例では治療前と同じ HPV genotype であったが (3/3 例)、再発を認めた症例では治療前と異なる HPV genotype であった。【結論】PDT 施行により子宮頸部病変が消失するのみならず、HR-HPV が治療後も持続的に減少し、6 カ月以後には高頻度に消失することが示された。

P2-3-8 CIN に対するフェノール組織破壊療法の効果と関連する因子の解析

金沢医大

笹川寿之, 山口直孝, 藤田智子, 高木弘明, 牧野田知

【目的】CIN1, 2 は原則的に外来追跡するが、患者の不安は大きい。また CIN3 に対する円錐状切除術は産科合併症の原因となる。我々は、外来で簡単に実施できる CIN 新規薬物療法を開発した。この治療の有効性、副作用、効果を妨げる因子について検討した。【方法】倫理委員会の承認の上、同意を得た 101 名の CIN 患者に 1-2 週間の毎に外来にて病変部に液状フェノールを塗布した。治療終了まで妊娠しないよう指導した。コルポ診と細胞診で治療効果を観察し、3 カ月毎の細胞診で 2 回連続陰性となった時点で治癒と判定した。また全例に HPV genotyping (Genosearch-31; MBL) を実施した。【成績】フェノール療法の副作用は一過性の下腹部痛、陰部痛、ふらつきなどであったが脱落例はなかった。CIN1/VAIN1 の 74% (32/43)、CIN2 の 85% (35/41)、CIN3 の 100% (17/17) に高リスク型 HPV 型が陽性であった。CIN3 の 1 例は途中で微小浸潤癌であることが判明した。CIN1/VAIN1 と CIN2 の全例がフェノール療法のみで治癒したが、CIN3 の 3 例 (19%) と微小浸潤癌 1 例は最終的に LEEP 切除術を追加した。治癒患者の平均治癒期間は、CIN1/VAIN1, CN2, CIN3 それぞれ 3.6, 6.2, 9.8 カ月、平均治療回数は 5.3, 9.2, 14.9 回であった。治療に抵抗する因子は、高 CIN グレード、HPV16, 18 型感染、多重型感染であった (P<0.05)。CIN3 に関してのみ、受動を含む喫煙がそれに関与する傾向 (P=0.059) を示した。【結論】CIN 患者に対するフェノール療法は安全であり、有効である。HPV16, 18 型感染、多重型感染、CIN グレード、喫煙は CIN 治癒を遅らせる要因である。